

「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」

フィリップ・K・ディック 訳 浅倉久

紹介者：榎本博康

[紹介]

21世紀の始め、アメリカのタイレル社は、人間そっくりのロボットである、アンドロイドを開発した。しかも体力、知力共に最高級の人間並である。アンドロイドは地球外基地での奴隷労働や惑星探検などに使われていたが、一部は反乱を起こして脱走する。リックの役目は地球に戻ったアンドロイドを処分することだった。彼らを見分ける最も信頼性のある方法はV Kテスト (Voight-Kampff Testing (フォークト=カンプフ検査)、人間とアンドロイドを識別するための感情移入度検査法) と呼ばれる心理テストであり、口答での質疑応答で感情を刺激し、主に応答速度で判別する。違いと言えばこの程度なのだ。

この時代は世界大戦の後で、地球は放射能に満ち溢れており、野生の生物は極度に減少していた。人々のステータスは本物の生きているペットを飼うことであり、そうできない人々は精巧な電気仕掛けの模造品を飼う。今侵入してきたアンドロイドを処分すれば、その懸賞金で本物を買うことができると、リックは妻の小さな喜びを期待してアンドロイドを追う。

[感想]

今、本の奥付を見ると1977年の国内初版だが、もっと早く読んだような気がしていた。原作は1968年に書かれたが、一見何ともシュールで狂気あふれる題名が、一方人間の模造品であるアンドロイドは同じく模造品の電気羊の夢を見て眠るのだろうか、極めて分かりやすい言葉で「人間て何？」と問いかけてくる。

所が本書はブレードランナー (BLADE RUNNER) というタイトルで1982年に映画化され、その好評によりさらにブレードランナー 2 (1995) と 3 (1996) が出版されている。しかもディックが死去しているため、K・W・ジーター (K. W. Jeter) が設定をそっくり受け継いで執筆している。これらの続編の是非もあるが、映画と続編にランナーというタイトルがついているが故に、ランニング文学探訪の一編と成り得たのである。この意味では是と言おう。

監督は「エイリアン」のリドリー・スコット、主演が「インディージョーンズ」のハリソン・フォードであり、映画化に際してアラン・E・ナースが書いた小説 “The Bladerunner” のタイトルの権利がスコットに売却されたとのこと。両作品の一致点は題名だけという話であるが、



今ナースの作品リストを見るとこのタイトルがない。売ったのだからないのだろうが、全くないのでは客観的に確かめようもない。しかし続編の「ブレードランナー2」の奥付には、通常の著作権表示以上に、この題名に特別な権利者がいることが明記されている。

道草が過ぎたが、この小説の主題に戻ると、読者は人間とは何かという問いかけに、実に不安になる。VKテストである以外は人間にしか見えないアンドロイド達。知恵遅れの人間達の疎外された生活。隣人のペットが模造品かを詮索する日常。逃亡アンドロイド達の前向きで真摯な生活。人間として登場している人物が、本当に人間であるかという不安。壊滅的な大戦の後で、一方的で、寡占されたテレビ番組を見つづける人々、情動制御装置と、電気ペットと、宗教に心の平安を見出そうとする人間が、本来の人間のように再生できるのだろうか。この小説の答えは、恐らくノーだ。

ノーと思える理由の一つとして、この小説で、不十分な説明だけで幾度も使用されるキップルという言葉がある。すべてのものがキップルになっていくというのだ。思うにこれは確実な終末への足取りであり、最大限にエントロピーが増大した世界への入口を覗き見ることである。

道具を使っていた人が死ぬと、その道具は意味を失い、キップルとなる。死ななくとも、子供が成長し古いおもちゃに見向きもしなくなれば、それもキップルである。例えそれがまだまだ使用できるものであってもだ。まして書き手と受け手を失った手紙はキップルであり、流行遅れの服や昨日の新聞はキップルとなる。さらにリックの労働そのものもキップルなのだろう。人類が滅亡するのであれば、未来のない労働はキップルの生産に他ならない。だからリックは家に帰って妻につぶやく。ちくしょう、今日はなんて長いマラソンだったろう、と。ここには徒労感しかない。私はこのキップルという言葉の持つ深い絶望感が、この小説の持っている奥行きであると感じる。

所で、ランナーという言葉だが、先に紹介したバトルランナーでは、狩られる立場の逃亡者だった。このブレードランナーでは逆に狩る立場の追跡者だ。所がこの題名を元々持っていたナースの小説では、非合法医に医療器具を密売する者のことだそうで、一体ランナーって何なんだろうかと首をかしげてしまう。

(初稿2001. 8. 15)

[リバイバル感想]

アンドロイドの類語はたくさんある。ブレードランナーではレプリカントと呼ばれるが、どうして変えたかは知らない。人間に近いサイボーグから人造人間、人型ロボット、ヒューマノイドなどがあり、ゲーテのファウストの登場するホムンクルスが古典では有名だが、同時代のフランケンシュタインもこの列に入るかもしれない。さらに最近はセクソロイドというものもある。映画のロボコップは本当に恐ろしかった。そしてごく最近、テスラが人型ロボットTesla Bot を発表した。発表のプレゼンではロボットスーツを着たダンサーの演



マンホール蓋のウランちゃん

技であったが、人間そっくりなので、実に不気味であった。日本の人型ロボットはソフトバンクのPepperなど、人型ではあるが明らかに人間ではなく、むしろ可愛らしくて友好的な外観のものが多く、ドラエモンに至っては猫型である。目的にもよるが、外観を人間に似せる必要があるのか、ちょっと疑問に思う。

しかしお話をしたいのはキップルである。本作では「キップルってのは、ダイレクト・メールとか、からっぽのマッチ箱とか、ガムの包み紙とか、きのうの新聞とか、すぐ役に立たないもののことさ。」と説明されている。そしてほおっておくと増殖するとも。

kippleの意味はエントロピー増大のことであるとか、いろいろと難しい説明もあるだろうが、私はあらゆる努力がゴミになることと理解している。これは上記の[感想]で書いた通りだ。

サラリーマン時代の仕事を考えると、キップルの生産をしてきたという思いが強い。現在も稼働している設備はあるが、早晚廃止になるだろう。いろいろな新製品を開発したが、ほとんどがビジネスとして廃止になった。多くの特許は既に陳腐化しており、また権利を維持しているものは皆無だ。残っているのは国会図書館に収蔵されている著作類だけだろう。それも読む人がなければキップルだ。なんだか情けなくなるが、だからこそ、時間は自分のためや、真に役立てたい人たちのために有効に使いたい。そのような現在だけがキップルとは無縁な瞬間だろう。そのような瞬間がぎゅっと詰まったものが音楽だと思う。

(2021. 8. 26)